

きゅうり姫 山形県

むかし、あつたけど。

むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。

あるとき、おばあさんは川に洗濯に行きました。洗濯をしていると、川上からきゅうりが流れてきました。おばあさんは、きゅうりをひろって家に持って帰り、糠床（ぬかどこ）の中に入れておきました。すると、赤ん坊の泣き声がしたので、糠床を見ると、女の赤ん坊が生まれていました。

おじいさんとおばあさんは、その子を育てることにしました。

「なんと名前をつけようか」

「きゅうりから生まれたから、きゅうり姫とつけよう」

きゅうり姫は、むぐ、むぐむぐと大きくなって、いい娘になりました。

ある日のこと、きゅうり姫は、おばあさんに、

「おばあさん、機織りがしたい」といいました。

「おまえはまだ小さいから、むりだ」

「そんなことをいわないで、機織りさせて」

きゅうり姫は、機織りのしたくをしてもらうと、

おお月 さあ月 こんごん月 つめの二十八日

管ねたて 織きる どんきん からん

おお月 さあ月 こんごん月 つめの二十八日

管ねたて 織きる どんきん からん

と歌いながら、いい音を立てて上手に機を織りました。

おじいさんとおばあさんは、裏の畑に仕事をしに出かけるとき、きゅうり姫にいいました。

「きゅうり姫、きゅうり姫。わしらは畑に行くけども、となりのあんまのしゃぐが来ても戸を開けてはならんぞ。なんぼ戸を開けろっていつでも、戸を開けるなよ」

おじいさんとおばあさんが出かけると、きゅうり姫は、留守番をして、

おお月 さあ月 こんごん月 つめの二十八日

管ねたて 織きる どんきん からん

おお月 さあ月 こんごん月 つめの二十八日

管ねたて 織きる どんきん からん

と、機を織っていました。すると、あんまのしゃぐが来て、

「きゅうり姫、戸を開けろ。きゅうり姫、戸を開けろ」といいました。きゅうり姫は、

「おじいさんとおばあさんが、戸を開けてはならんっていったから、開けられない」といいました。

「そんなことをいわないで、少し開けろ」

「いやだ。開けられない」

「爪だけ開ける。爪だけでいいから、少し開ける」

きゅうり姫は、戸を爪だけ開けました。すると、あんまのしゃぐは、戸をガラッと開けてしまいました。そして、

「きゅうり姫、きゅうり姫。長者野の向こうに桃もぎに行こう」とさそいました。きゅうり姫は、

「行かない。おじいさんとおばあさんにしかられる」と答えました。あんまのしゃぐは、「そんなことをいわないで、げたをはいていこう」といいました。

「げたをはいたら、カッカッって音がして、おじいさんとおばあさんに聞こえる」

「じゃあ、ぞうりはいていこう」

「ぞうりをはいたら、スッパタラ、スッパタラって音がして、聞こえる」

「じゃあ、おれの背中におぶさって行こう」

「おまえの背中とはげが生えてて、痛いからいやだ」

「じゃあ、むしろを着るから、おれの背中におぶされ」

あんまのしゃぐがむしろを着たので、きゅうり姫は、あんまのしゃぐの背中におぶさって、長者野の向こうに行きました。

長者野の向こうにはももがいつぱいなっていました。あんまのしゃぐは、

「おれが登ってもいでやる」といって、ももの木に登っていきました。そして、自分は、よくうれたおいしいものを食べて、きゅうり姫には、まずいももばかりポダリ、ポダリと落しました。

「うまいももを投げておくれ」と、きゅうり姫がいうと、あんまのしゃぐは、

「これか」といって、かじったももを、ボン、ボンと投げてよこしました。

「かじったももはいやだ」と、いくらいっても、かじって投げてよこしました。

「これではなくて、かじっていないももを食べたい」と、きゅうり姫がいうと、あんまのしゃぐは、

「そうか、そうか。じゃあ、おまえ、自分で登ってとれ」といいました。

そこで、きゅうり姫は、ももの木に登っていきました。すると、あんまのしゃぐが、下から、

「きゅうり姫、そっちのももがうまいぞ」といいました。

「これか」

「いや。もっと上のだ」

「これか」

「もう少し、もう少し」

きゅうり姫は、ずんずん登って枝の先までいきました。

「きゅうり姫、それだ」

あんまのしゃぐがいました。きゅうり姫は、ももをもこうと手をのばしたひょうしに、木から落ちて死んでしまいました。

あんまのしゃぐは、きゅうり姫の顔の皮をずらりとはいいで、自分の顔にかぶってきゅ

うり姫に化けました。そして、おじいさんとおばあさんの家に行って、機織りをしていました。あんまのしゃぐは、機織りがへたで、

ドダリ、バダリ、ドダリ、バダリ

と音がしました。

おじいさんとおばあさんは、帰ってきて、

「なんだろう。きゅうり姫は、機織りがへたになったよ。いつもなら、

おお月 さあ月 こんごん月 つめの二十八日

管ねたて 織きる どんきん からん

つて、音がするのに、きょうは、

ドダリ、バダリ、ドダリ、バダリ

と音がする」といいました。

あんまのしゃぐは、

「手にまめができて痛いから」といいました。

あくる朝、おじいさんとおばあさんが、流して顔を洗っていると、鳥が飛んできて、

きゅうり姫の乗り車さ あんまのしゃぐ ぶぢ乗った

ホッホッ ホケチヨ

きゅうり姫の乗り車さ あんまのしゃぐ ぶぢ乗った

ホッホッ ホケチヨ

と鳴きました。

おじいさんが、

「きゅうり姫、きゅうり姫。おまえも顔を洗え」というと、きゅうり姫に化けたあんまのしゃぐが出てきて、顔を洗いましたが、指一本でコスコスと顔をなでるだけです。おばあさんは、

「なんだ、きゅうり姫。そんな洗いかたはだめだ」といって、きゅうり姫の顔をこすりました。すると、皮がはげて、あんまのしゃぐになりました。

おじいさんとおばあさんは、

「こんちくしょう。にくいあんまのしゃぐめ」といって、萱（かや）であんまのしゃぐをジャギジャギとついて殺してしまいました。

だから、今でも、萱の根元は赤いのだそうです。

どんぺからんこ・ねですは